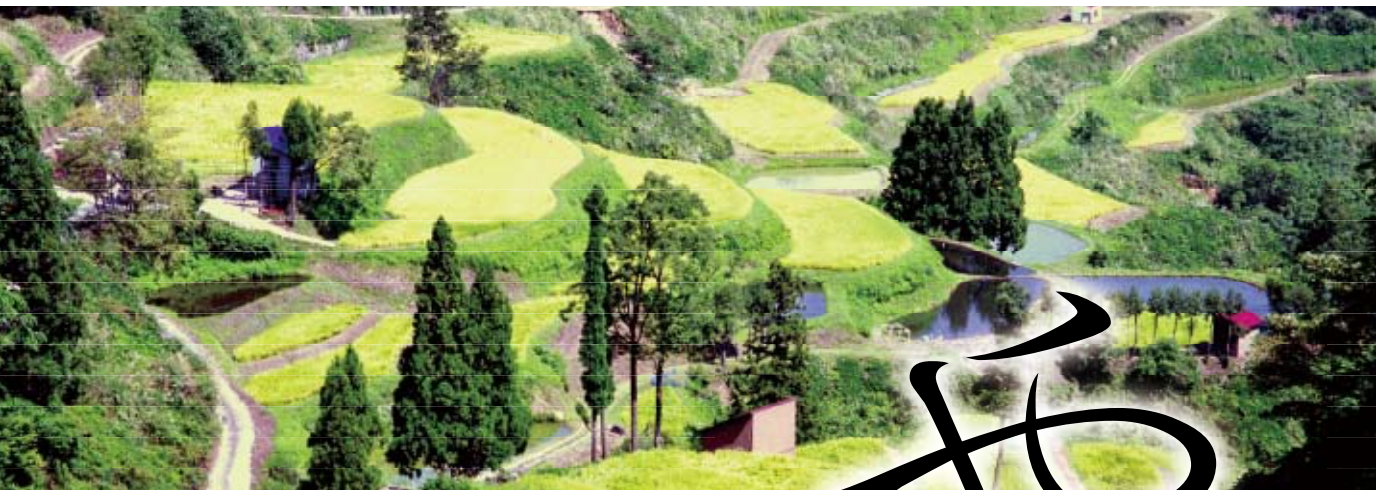
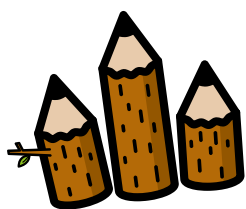




やまこし

ふるさとガイド

つなごう山古志の心





はじめに

この本は、^{ほん}やまこし検定のためだけでなく、^{あらた}改めて私^{わたくし}たちが暮らす^く山古志の^{やまこし}伝統や文化^{でんとうぶんか}を^{まな}学び、^{しょうちゅうがくせい}小・中学生を^{はじ}始めとする^じ次世代^{せだい}へ山古志の^{やまこし}魅力を^{みりよく}語り^{かた}継ぐための^{さんこう}参考^{おも}になればと思^{さくせい}い作成しました。

^{さいがい}災害などで資料が^{しりょう}残^{のこ}っていないこともあり、内容は確^{ないよう}実^{かく}なものばかりではありませんが、この本をきっかけに^{ほん}ご家族やご近所^{きんじょ}、ご友人^{ゆうじん}などと世代^{せだい}を越えて山古志^{やまこし}に^{かた}ついて語りあっていたけると嬉しいです。

^{やまこし}山古志の歴史や伝統が次の世代、また次の世代へ語り^つ継^{ねが}がれることを願っています。

^{やまこしちいき}山古志地域ふるさと^{そうせいじぎょうじつこういいんかい}創生事業実行委員会

目次

8	山古志の由来	
9	山古志の集落	各集落ごと
24	年中行事	盆踊り さいの神 十二講
27	伝統芸能	大久保神楽 山古志の盆唄 木遣り 石場かち唄 田植え唄 子守唄
31	文化財	牛の角突き 白髯神社の樹林 書籍、南総里見八犬伝 大久保桂の木 木筆諏訪神社の樹群 中野愛宕庵 大日如来坐像
35	史跡と伝説	三味線石 あまやちの池の伝説
37	山古志の一年	山古志の生業カレンダー
38	山古志と棚田	棚田と山古志の農業
41	山古志と鯉	錦鯉の歴史 鯉料理
43	山古志と牛	生活の中の牛 闘牛の歴史
47	その他の仕事	出稼ぎ 養蚕 炭焼き
50	隧道	山古志と隧道 隧道の紹介
54	冬の暮らし	冬の道づくり 冬の食料
57	ヤマとの暮らし	山での生活
59	中越大震災の発生から帰村まで	
63	協力者等	



昭和初期の牛の角突き



いろりを囲む団らん風景 1990 (H2) .4.22 片桐



タニウツギ(ろうっば)と棚田 2001 (H13) .5.20 片桐



生活の中の牛 1987 (S62) .5.4 片桐



田植え風景 1997 (H9) .5.12 片桐

山古志の由来

「古志」という言葉は古くからあります。

「先代旧事本紀」の「国造本紀」に「高志国造 志賀高穴穂(成務天皇)朝御世、阿閉臣祖屋主田心命三世孫市入命定賜国造」とあり、神話時代に県中央部一帯に本拠のある大彦命の子孫が国造に任命されたことが記されています。はっきりした記録になると平安時代中期に書かれた「和名抄」で古志郡と三島郡が分立しており、「高志」「古志」という地名は非常に古くからのものであることが分かります。

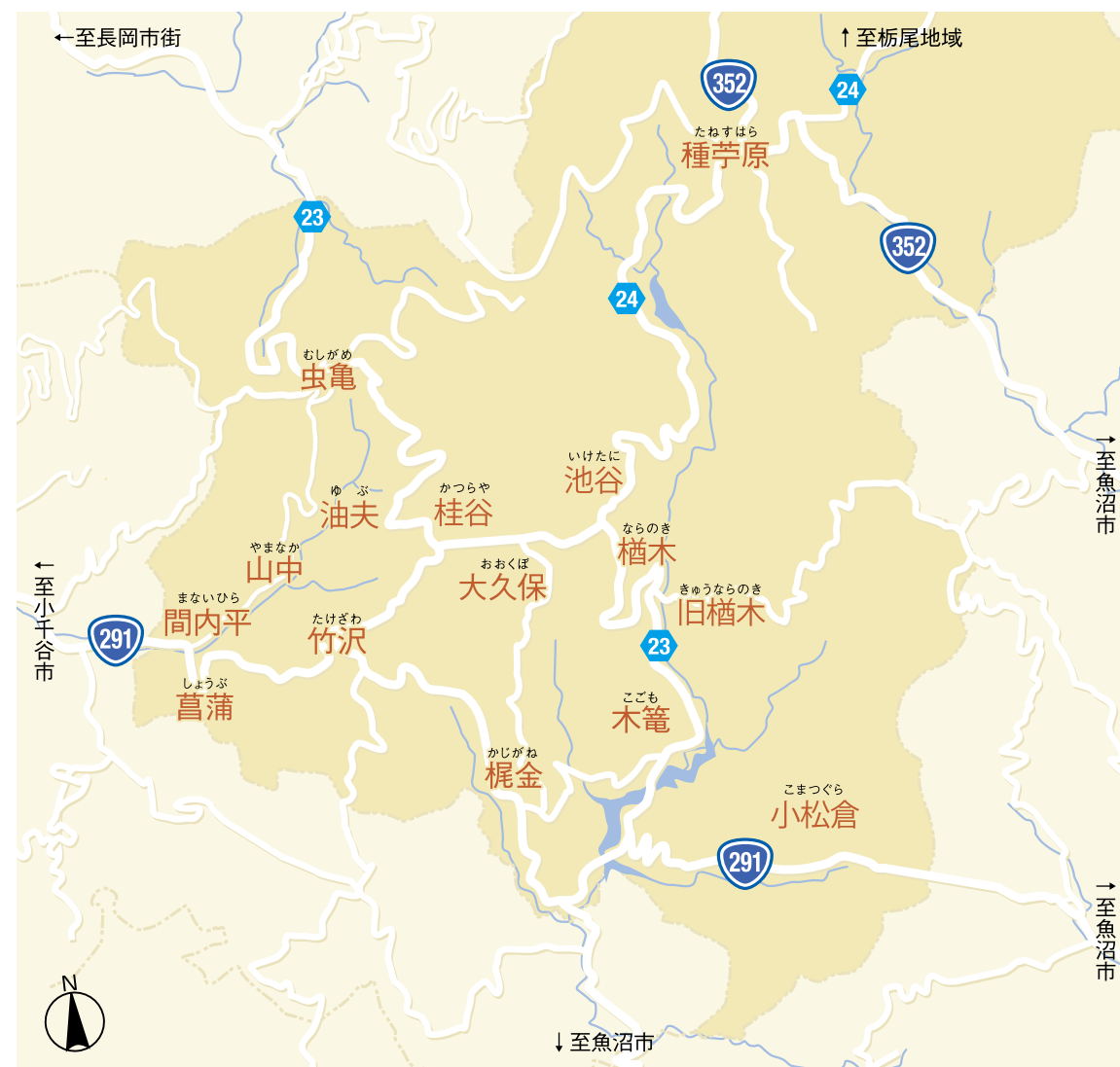
江戸時代になると、1618(元和4)年から山古志地域は長岡藩領となり、山六ヶ村と山二十村に分けられました。1702(元禄15)年以降は幕府領に編入され、二十村がこの地域全体の呼称となり、幕末には「山古志組」と呼ばれるようになりました。

明治時代に入り、現在の市町村制につながる制度が実施されるようになると、いくつかの集落がまとまって行政の村となりました。その後、明治の大合併を経て、1956(昭和31)年に山古志村ができました。山古志村は2005(平成17)年に長岡市と合併し、現在に至ります。

山古志の集落

現在山古志には14の集落があります。集落の成り立ち集落名の由来などを集落の方に聞きました。

【集落の位置図】

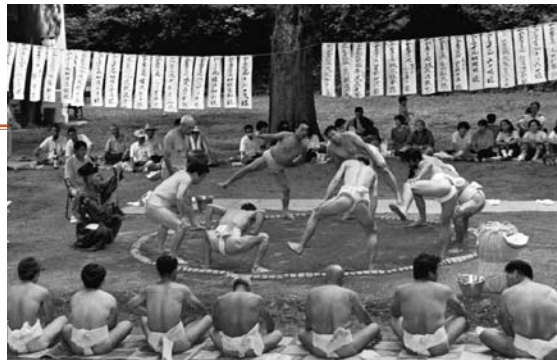


種芋原

種芋原の成り立ちは、源氏の落人

といわれています。坂牧丹後之守の

子である源左エ門、健蔵が北条氏に



伝統行事の奉納相撲 1999 (H10) .9.5 片桐

追われ、栖吉の善照寺に逃げ込んだところ、お寺の人から「萱峠を越える

と安全な窪地がある。」といわれ、たどり着いたところが今の種芋原だっ

たそうです。その窪地は、芋※が群生した原っぱであったことから種芋原

という集落名になったといわれています。集落の戸数が増えるにつれ、

種芋原、中野、寺野に分かれたといわれていますが、一説には中野、寺野は

それ以前に開村されていたともいわれています。

また、9月に開催される種芋原まっりの奉納相撲は、熊野神社で行わ

れていますが、中野の八幡神社が起源といわれています。

(平成22年12月16日 坂牧吉太郎さん、坂牧正憲さん、坂牧宇一郎さん、樺澤三治郎さんから聞き取り)

注釈 ※ 芋 (からむし)

イラクサ科の多年生植物。くきの皮からは衣類、紙などに利用できる丈夫な繊維が取れる。中世の越後国は、日本一のカラムシの産地だったため、戦国大名として有名な上杉謙信は衣類の原料として京都などに積極的に売り出して、莫大な利益を上げた。魚沼地方で江戸時代から織られていた伝統的な織物、越後縮はこれで織られていた。

虫亀

集落名の由来は不明ですが、「ムーシ

カイイ」(食べ物が豊かにある土地という

意味)あるいは、「イシ(石)カムイ(神)」と

いうアイヌ語が語源ではないかという説と、もともと集落北の入口に亀に

似た石があり「イシガメ(石亀)」と呼ばれていたが、支配していた役人が聞き

間違えたか、書き間違えて現在の「虫亀」になったという説もあります。

また代々、虫亀の中央部に居住する、五十嵐姓の祖は、西蒲原郡下田村

(現在の三条市)の豪族であった五十嵐小文治の流れを汲む者が移り住

み、自然環境や土壌がよかったことから、同じ下田村の佐藤家を迎えて

庄屋※とし、村の繁栄を図ったと伝えられています。

現在は行われていませんが、1955(昭和30)年ころまでは虫亀でも

神社への奉納相撲が行われ、種芋原と交流をしていました。

(平成22年12月24日 酒井省吾さんから聞き取り)

注釈 ※ 庄屋 (しょうや)

江戸時代、領主が村民の名望家中から命じて、郡代・代官に属させ、一村または数村の納税その他の事務を統轄させた村長の長。むらおさ。畿内西国方面では庄屋、東国方面では名主と呼ぶことが多い。

池谷

いま ねん くらい まえ へいけ
今から650年くらい前、平家の
おちうど さいとう に えもん
落人であった斎藤仁右衛門がこの
ち す じゅうらく はじ
地に住んだことが集落の始まりと
いわれています。そして、あおき せい
青木の姓



八幡神社でのさいの神 1992 (H4) .1.15 片桐

お ち や し ひ う い から し せい に しかんばらぐん したむら げんざい さんじょうし
は小千谷市蕨生から、五十嵐の姓は西蒲原郡下田村(現在の三条市)から
いけたに き
池谷へ来たといわれています。

いけたに しゅうらくめい いけ き
池谷という集落名は、2つの池から来ているといわれています。1つ
め いけ いけたにしゅうらく たねすはら よ ねこまたざわ おお じ
目の池は、池谷集落の種苧原寄りにある猫又沢からの大きな地すべりに
よって芋川がせき止められてできた池、もう1つは、おおくぼ おお じ
べりにより東川がせき止められできた池。この2つの池から「池谷」とい
しゅうらくめい
う集落名になったといわれています。

へいせい ねん がつ にち あおきこうしち さいとうとしゆき き と
(平成22年12月10日 青木幸七さん、斎藤利行さんから聞き取り)

檜木

おおがたまちどそこはま げんざい じょうえつし
大潟町土底浜(現在の越前市)の
あぜがみ ろうにん いけたに さいとう に
畔上という浪人が池谷の斎藤仁
えもんたく たず す こ
右衛門宅を訪ねて、住み込むよう
なり、その後、ご しんでん かいはつ
新田※開発をするた
め きょじゅう ならのきしゅうらく はじ
に居住したことが檜木集落の始まりといわれています。



震災前の檜木集落 1982 (S57) 4.11 片桐

また、現在の檜木集落付近から旧檜木集落を見下ろしたときに、檜の木
がたくさんあったことから現在の「檜木」という集落名になったそうで
す。いぜん ならのきしんでん しんでん よ じ き ならのき しんでんかいはつ
以前は、「檜木新田」や「新田」と呼ばれた時期もあり、檜木に新田開発
をしたことがそう呼ばれていた理由と考えられます。

いぜん ふどうさま す わ じんじゃ じゅうにじんじゃ しゃ
以前は不動様、諏訪神社、十二神社の3社がありましたが、1956(昭和
31)年 ねん ごうしゃ げんざい じゅうにじんじゃ
ころに合社して現在の十二神社となりました。

へいせい ねん がつ にち あぜがみ かきち ふじいしょうさく あぜがみたち き と
(平成22年12月9日 畔上嘉吉さん、藤井正作さん、畔上孝さんから聞き取り)

注釈 ※ 新田 (しんでん)

あら かいこん でんち とく えど じだい ちゅうせいぜん こんでん
新たに開墾した田地。特に江戸時代のをいい、中世以前には墾田という。

竹 沢

いつの時代かわかりませんがこの地に住んだ竹沢の庄屋である星野家(屋号:おやじ)が集落を開いたといわれています。この星野の



お盆のみこし 1989 (H1) .8.16 片桐

姓は、長岡市や小千谷市にも多く、魚沼から入ってきたともいわれています。また、九州にも星野の姓があり、その流れを汲むという説もあります。竹沢の佐藤の姓と星野の姓も古いといわれています。

竹沢集落は、下村、二丁野、大内、向田の4つの集落に分かれていましたが、1971(昭和46)年4月に下村と大内、1986(昭和61)年4月に下村と向田、1990(平成2)年4月に下村と二丁野が合併し、現在の「竹沢」となりました。昔から下村と二丁野を指して竹沢といったそうですが、「竹沢」という名称の由来はわかりません。

(平成22年12月15日 星野三男三さん、星野仙嗣さん、星野清剛さんから聞き取り)

間 内 平

集落の由来は定かではありませんが、昔は今より竹沢寄りに集落が位置していました。地すべりを繰り返し、集落が徐々に移動して現在



間内平集落の錦鯉市場 1980 (S55) .11.3 片桐

の位置になったそうです。また、集落の成立は、竹沢集落や菖蒲集落より遅いといわれ、両集落の間にできたことから「間(あいだ)」の字を取って間内平となったといわれています。

1940年代まで8月14日に十二神社の祭礼を行い、鍋で和紙を煮てたべるといいう風習がありました。紙を食べると体が丈夫になるといわれていたそうです。また、ほかの集落にはあまり見られない、お椀などの漆塗り※も行われていたそうです。

(平成22年12月11日 高野一衛さん、川上春雄さんから聞き取り)

注 釈 ※ 漆塗り (うるしぬり)

きぶつ うるし ぬ 器物に漆を塗ること。また、その器物。また、その職人。

菖蒲

時代は不明ですが、星野九郎右エ門が竹沢にあった庄屋の分家※として、この地に居住したことが菖蒲の始まりといわれています。その居住したところが、菖蒲の咲くころだったので現在の集落名になったそうです。



菖蒲集落の観音様 1988 (S63).4.21 片桐

また、岡本の姓が菖蒲にあるのは、武士であった岡本重右エ門が上杉謙信に攻められたため、北魚沼郡根小屋(現在の魚沼市)にある城から逃れなければなりませんでした。そして、焼山の中腹で星野九郎右エ門の家の明かりを見つけ泊めてもらい、その後、九郎右エ門の姉と夫婦となりこの地に住みついたことが由来といわれています。

菖蒲集落では、1960(昭和30)年ころまでこんにゃく作りが盛んで1軒で400kgずつ出荷していたそうです。

(平成22年12月18日 星野徳治さん、星野芳英さん、星野寅吉さんから聞き取り)

注釈 ※ 分家 (ぶんけ)

家族が任意にその家を去って新たに一家を設立すること。また、設立したその家。新家。第二次大戦後、「家」の制度の廃止に伴い、法律上は認められない。

山中

集落の成り立ちや、名前の由来について古い記録は、火災などによって残されていません。しかし、小川六右エ門と星野久左エ門の2軒が



山中集落のさいの神 2008 (H20).1.13

住んだことが集落の始まりではないかといわれています。現在の小川姓と星野姓はすべてこの分家です。そのため、さいの神や節分などの行事はそれぞれの家系ごとに行い、特に節分では星野家系が豆をまき、小川家系は豆をまかないという面白い風習もあったそうです。また、集落内に鎮守様がないため、大内(現在は竹沢集落の一部)の住民と一緒に薬師様を管理し、盆踊りを一緒に行う伝統もあったそうです。

(平成22年12月9日 星野敏雄さん、小川勝行さんから聞き取り)

油 夫

油夫の集落名は、その昔、油が取れたことから、「油」の字を取ったという説があります。また、八久保家の家系図から、400年以上前から集落に人が住んでいたことがわかっています。



戦前に行われた石油試掘の様子

昔、集落の神社である石動神社の近くに子ども10人が手をつないで輪になっても届かないほどの日本一の大杉がありました。その大杉は、雷が落ちて焼けてしまい現在はありますが、火が三日三晩消えなかったほどの大木だったそうです。そのほかにも、雷により焼けてしまった木が多くあり、油夫は雷の巣といわれていたそうです。

(平成22年12月21日 ハ久保チイさん、関幸雄さんから聞き取り)

桂 谷

桂谷集落は、古くは平家の落人が開いたといわれています。また、昔は小池の姓が多く、小池姓の人が集落を開いたのではないかとされています。集落名は、昔「桂の木」が集落にあったことから「桂」の字をとったのではないかとされています。



桂谷集落の風景 1979 (S54) 4.8 片桐

集落の神社である飯綱神社は、神明神社が始まりだそうです。いつのころかわかりませんが、長野県の飯綱神社の流れから、飯綱神社となったといわれ、戦勝の神として信仰されていたカラス天狗※がまつられています。

また、羽黒山では、日照りが続いたときに雨乞いをしたところ、大雨を降らせたという言い伝えがあります。

(平成22年12月22日 高野哲四さん、小池正瑠さんから聞き取り)

注 釈 ※ カラス天狗 (からすてんぐ)

とりのようにくちばしや羽を持つ伝説上の生物。

梶 金

集落の生い立ちは不明ですが、五十嵐の姓は、今から600年から700年くらい前に西蒲原郡下田村(現在の三条市)の



梶金集落の風景 1990 (H2) .1.14 片桐

五十嵐神社からこの地に住みついたといわれ、関の姓は300年くらい前に桂谷から梶金に来たことに始まり、庄屋をしていたといわれています。藤井の姓は、年代はわかりませんが関の姓より古くからこの地にあったそうです。そのほかに梶金には、川上という姓もあります。

集落名は、馬蹄※1などの農具を作る鍛冶屋※2が集まっていたことが由来といわれ、昔は梶金を「鍛冶金」と書いていたといわれています。

また、現在行われている盆踊りは8月14日ですが、戦前は8月15日に行われていました。昔から集落の結びつきが強く、お盆の期間中にどこかの家で不幸があると集落の行事を取りやめたそうです。

(平成22年12月27日 関幸作さんから聞き取り)

注 釈 ※1 馬蹄 (ばてい) うまのひづめ。

※2 鍛冶屋 (かじや) 鍛冶を職業とする人。また、その家。釘抜きに用いるし字形の鉄槌。

大 久 保

大久保集落は、1589(天正17)年、関東地方から三国峠を越えてきた五十嵐武左エ門一族がこの地に居住したことに始まるそうです。



大久保神楽とさいの神 2002 (H14) .1.13 片桐

また、長岡藩の中で75人で引けなかったものを1人で引いたといわれる川上重右エ門が、1647(正保4)年に五十嵐武左エ門宅に来てこの地に住んだことが川上姓のはじまりといわれています。集落名の由来は不明ですが、五十嵐武左エ門家の3代目である治太右門のころに「大窪」という漢字を「大久保」と改めたとされています。

現在はありませんが、大久保には真綿※を糸にする工場があり、女性10名くらいが働いていたそうです。

(平成22年12月19日 集会時に大久保集落のみなさんから聞き取り)

注 釈 ※ 真綿 (まわた)

繭(くずまゆ)を引きのばして作ったわた。白く光沢があり、やわらかくて軽い。主として防寒用衣類などに用いる。絹綿。

木 簗

集落ができた時代は不明ですが、
集落の神社である諏訪神社は、江戸
時代初期に建立されたと伝えられ
ていますので、それ以前に集落が



木簗集落の盆踊り 1997 (H9).8.15 片桐

あったと推測できます。また、平家の落人が集落を開いたという説があり
ます。

木簗には、二十村郷※一の林があったといわれ、そこから、「木」の文字
をとったのではないかとわれています。木が豊富であったことから、
炭焼きが盛んで役場や学校に炭を売っていました。

木簗の「袖」地区は、昔、本村の外という意味で「外」と書いていたそうです。

(平成22年12月22日 松井治二さん、松井キミさん、上田勇五郎さん、

上田久江さん、松井正治さん、畔上喜一さんから聞き取り)

注 釈 ※ 二十村郷 (にじゅうむらごう)

ながおかしおた やまこし かわぐちいき お ち や しひがしやまほくぶ いったい にじゅうむらごう そうしやう にじゅうよ むら
長岡市太田、山古志、川口地域、小千谷市東山、北部の一帯は、かつて「二十村郷」と総称され、二十余の村があったからと
か、一度なくなった村を再び起こしたから二重村という、いくつかの伝承がある。

小 松 倉

1187(文治3)年、源義経※1の家
臣※2であった片岡三郎、亀井六郎、
志賀住左エ門、志賀小左エ門、
増田孫治右エ門が奥州から落ち延



中山隧道 2007 (H18).6.13

び、小松倉へ着いたときには、すでに人が住んでいたといわれています。

このとき、片岡三郎が大日如来坐像を、亀井六郎が十一面観音像を背負っ
てきたといわれ、現在では、大日如来坐像がこの地へ安置されています。

小松倉という集落名は、1460(寛正元)年から1470(文明2)年ころ、
中魚沼地方からこの地へ移住した小松原中納言からきているといわれて
います。当時は大栖平という集落名でしたが、小松原中納言が小松倉民部
太夫と改名すると同時に、小松倉という集落名になったといわれています。

(平成22年12月16日 小川晴司さんから聞き取り)

注 釈 ※1 源義経 (みなものよしつね)

へいあんまつき ぶしょうよしども きやうなんようめい うしわか ななさい くらまでら はい つ おつ ふじわらのひでひら もと み よ
平安末期の武将。義朝の九男。幼名は牛若。七歳で鞍馬寺に入り、次いで陸奥の藤原秀衡の許に身を寄せたが、1180
(治承4)年、兄頼朝の挙兵の応じて義仲を討ち、更に平氏を一谷・屋島・壇ノ浦に(の合戦で)破って全滅させた。

※2 家臣 (かしん) いえ つか しん けにん けらい
家に仕える臣。家人。家来。

盆踊り

盆踊りは、お盆に迎えた仏様の霊をなぐさめ、ふたたび送りだすために行われます。以前は、お盆のときだけではなく、神社や鎮守様の命日などにも行っていたそうです。集落によってやり方はさまざまですが、4隅の柱に萩とカヤがつけられたやぐらの上で太鼓を打ち、音頭とりの甚句にあわせて輪になって踊ります。

若い人たちは盆踊りのときに化粧をしたり、山笠をかぶるなど変装をして踊ったそうです。また、ほかの村(集落)から酒樽をかついだ若い衆が来て踊りの輪に加わったと山古志村史に記されており、若者たちの交流の場でもあったそうです。



池谷集落 1994 (H6).8.15 片桐



虫亀集落 2006(H18).8.15

さいの神

さいの神の作り方や形は、集落によって違い、青竹や門松を芯にしたり、松の木で骨組みを作り、ワラを積み上げつくったそうです。さいの神は、前年使用したお札やしめ縄などと正月に書いた書き初めを一緒に飾ります。

昔から集落で1つのさいの神をつくっていたわけではなく、世帯ごとや本家と分家で行ったり、集落で数箇所に分けてつくるなど、集落の中に複数のさいの神がつくられたそうです。

さいの神では、「さいの神で餅を焼いて食べるとまめになる」や「さいの神の煙の行った家は豊作になる」「書き初めが火に煽られて空高く上がると字が上手になる」など数々の俗信も伝えられています。



榎木集落 2008(H20).1.13



種芋原集落 2007(H19).1.16

十二講

十二講は、旧暦の2月12日に十二山の神をまつる神社や内鎮守などで行われます。山の神様に魔よけや狩の殺生の浄化、五穀豊穰※などを願ひ、弓で木や的、その年の方角などへ向かって掛け声とともに矢を射ます。掛け声は集落によってさまざまです。

現在は、個人で行われるほかに、種芋原、梶金、大久保集落などでは集落行事として行われています。梶金集落では、2009（平成21）年に集落行事として約30年ぶりに復活しました。



池谷集落 1992 (H4) .3.12 片桐



小松倉集落 1990 (H2) .3.12 片桐

注釈

※五穀豊穰（ごこくほうじょう）

5つの穀物（イネ・ムギ・アワ・キビ・マメ）が豊かに実ること

大久保神楽

大久保神楽は、大久保地区に伝わる神楽舞いです。

大久保神楽の歴史は、今から200年以上前、江戸時代の寛政期にまでさかのぼるといわれています。当時、北蒲原郡安田の角兵衛獅子が巡業していた折に、獅子を見た大久保の人たちが魅せられ、自分たちでもやってみようと始めたそうです。それから、新築祝いや神社の祭りなど厄祓い、悪魔祓いとして演じられるとともに、冬場などには村の外への巡業も行われていたそうです。後継者不足により一時途絶えましたが、2002（平成14）年に「大久保神楽保存会」がたち上がり活動をしています。



虫亀集落の諏訪神社にて 2006 (H18) .8.15

天神ばやし

宴会の終わりに出る唄で、この唄を歌い終わった時には杯が空になっていなければならないといひます。この曲を聞いて酒を残らずいただくことを牛の尾っぽといひます。大地主や旦那衆は強い闘牛も飼育していた家なので、牛の幸先もよい様にとの願いもこめられています。曲目名は塩沢町の地名からきており、元は田打ちの際の労働歌でしたが、宴席でも歌われるようになったものです。山古志では祝宴や上棟式以外にも、正月11日の蔵開きにも歌われます。

石場かち唄

昔の家屋は土台となる石場石の上に柱を立て、石を土に搗きこむ作業を「石場かち」といひました。その作業の時歌われたのが「石場かち唄」で、石の少ない山古志の谷川から見つけた大きな石を柱の数ほど現場に背負い集めると、一人の音頭取が力強く歌い出したそうです。一節終ると綱引きの人達が声をそろえて「岩持って来い」「水持って来い」のはやし唄を歌い、心をとつに作業のリズムを造り出しました。

木遣り

木の伐出や家を建てる時、息を合わせるために歌われる木遣り唄は、山古志の家が、すべて茅葺だった頃、新築・改築の折に歌われました。木遣り唄の音頭取りは、村中で一番声のいいよく通る声の持ち主で、さらに道の高低やカーブを考えできるだけスムーズに運べる才量がなくてはならず、村に適当な人が居ない場合は、近郷近隣から人を呼んだといひます。音頭取りの声に合わせ、大物引きの人夫達が心と力を一点に集中して引き綱を引きました。

田植唄

田の神を讃えて豊穰を願う昔ながらの労働歌です。緋の仕事着、真新しい手拭で姉さんかむりの若い女性の早苗取りから始まる田植え作業で、小苗が田んぼに投げ打たれ、4人5人と並んで植え始めると、唄自慢の男がまず美声を張りあげて交替で歌います。静かな唄に合わせ植える手先も身ぶりもひとつのリズムになり、青々と植え終えた田の面をそよ風とともに流れる歌声がひとしお初夏を呼びます。

山古志の盆唄

にじゅうむらごう やまこし しゅうへんしゅうらくいったい ぼん がつ たち はじ
二十村郷(山古志と周辺集落一帯)のお盆は、8月1日に始まります。
そして、13日に家々に迎えた祖霊を返すため16日ごろに神社で盆踊りを
盛大に踊るのはほかの地域と同じ習わしでした。そこで歌われる盆唄の
起源は定かではありませんが、歌詞から新発田との関係がうかがえるほ
か、新潟や五泉、長岡などの地名が織り込まれ伝来の経緯を思わせます。

子守唄

にほん こもりうた おや おさな こきょう はな こもりむすめ うた
日本の子守唄には親ではなく幼くして故郷を離れた子守娘が歌ったも
のが多いですが、山古志の子守唄もその類とされます。米の足りない小作
人や日雇家庭は、子どもが9才から12、3才頃までに他家に子守に出し
たといいます。子守娘は背の子が泣けば一緒になって泣きました。川魚の
と取れない山古志では普段魚を口にすることはめったになく、歌詞の「ねん
ねしたらおいしい赤飯と魚をあげる」というのは最高のご馳走をあげる
という意味です。

くにしてい ぶんかざい
【国指定の文化財】

牛の角突き (重要無形民俗文化財)

ふる でんとう うし つの つ きげんとう さだ こだい
古い伝統のある牛の角突きの起源等は定かではありませんが、古代から
神事として行われていました。徳川時代の文豪、滝沢馬琴の南総里見八
犬伝によると古志郡二十村に毎年3～4月の頃、吉日をえらび角突きと唱
えたる闘牛(うしあわせ)の神事ありと記されています。

(1978 (昭和53)年指定)



東山ファミリーランド臨時闘牛場にて 2005 (H17) .8.3

【新潟県指定の文化財】

しらひげじんじゃ じゅりん てんねんきねんぶつ
 白髯神社の樹林 (天然記念物)
 所在地: 竹沢

いま ねん まえ へいけ おちうど ち
 今から350年くらい前に平家の落人がこの地に
 いじゅう うじがみ た じんじゃ き
 移住し、氏神として建てられたのがこの神社で、記
 ねん う すぎ もり ごまいとし じんじゃ
 念として植えた杉の森です。その後毎年この神社の
 まえ どうぎゅう さいじ おこな
 前で闘牛(うしあわせ)の祭事が行われていました。
 (1973 (昭和48)年指定)



【長岡市指定の文化財】

しよせき なんそうさとみ はっけんでん
 書籍、南総里見八犬伝 (有形文化財)

1814 (文化11)年～1842 (天保13)年
 の長きにわたり発行された書籍で、初版本が
 ぜんかん さつ そろ ぜんこく
 全巻(106冊)揃っているのは全国でも4～5
 けん
 件しかないといわれています。伝統ある山古
 しごう うし つのつ くに じゅうようむけい みんぞくぶんかざい きちよう し
 志郷の牛の角突きを国の重要無形民俗文化財として認められた貴重な資
 りょう
 料です。(1977 (昭和52)年指定)



【長岡市指定の文化財】

おおく ぼ き てんねんきねんぶつ
 大久保の桂(こう)の木 (天然記念物)
 所在地: 大久保

むかし ちくみん こころ した
 昔から地区民の心のよりどころとして親しまれ
 ています。また、じゅうに やま かみ まつ ねんちゅうぎょうじ じゅうに
 十二山の神を祭り、年中行事(十二
 こう いま おこな じゅれいやく ねん おおく
 講)などを今でも行っています。樹齢約600年、大久
 保の歴史を知るうえから貴重な天然記念物です。
 (1977 (昭和52)年指定)



【長岡市指定の文化財】

こごもす わ じんじゃ じゅぐん てんねんきねんぶつ
 木竈諏訪神社の樹群 (天然記念物)
 所在地: 木竈

じゅれい ねんあま たいじゅぐん
 樹齢350年余りといわれる大樹群(ケヤ
 キ)は、しゃでん うじがみ けいあい
 社殿とともに氏神として敬愛され、
 うじこ
 氏子のシンボルとして、うやまわれています。
 (1982 (昭和57)年指定)



1979 (S54) .5.27 片桐

ながおかししてい ぶんかざい
【長岡市指定の文化財】

なか の あた ご あん しせき
中野愛宕庵 (史跡)
しよざいち たねすはら
所在地：種芋原

たいじゆ かこ しき ち めん せきやく つぼ し せき
大樹に囲まれた敷地面積約50坪の史跡。

むかし ぜんでら えんゆう じ ぶん じ けんぞう ふる
昔、禅寺(円融寺の分寺)として建造され、古く

から氏子のよりどころとされています。また

周囲には五輪の塔や石仏が置かれています。

(1982 (昭和57)年指定)



1979 (S54) .7.8 片桐

ながおかししてい ぶんかざい
【長岡市指定の文化財】

も く ぞ う だ い に ち に よ ら い ざ ぞ う ちようこく
木像、大日如来坐像 (彫刻)
しよざいち こまつぐら
所在地：小松倉

ぶつぞう やまこし いちばんふる かまくらまっ き ざいしつ
仏像では山古志で一番古く(鎌倉末期)、材質

が“こうくり”※で作ってあることから“こうく

り”の下駄は履いてはならない、とまでいわれ

た崇高な仏像です。(1982 (昭和57)年指定)



注 釈 ※ こうくり

べつめい か しよくぶつ さわ やまあい しめ ばしよ しよくせい げた かぐざい つか み しよくよう
サワグルミの別名。クルミ科の植物で沢など山間の湿った場所に植生し、下駄・家具材などに使われる。実は食用にはならない。

し ゃ み せ ん い し
三味線石 しよざいち むしがめ
所在地：虫亀

むかし ふぶき よる ふたり ご ぜ
昔、吹雪の夜に二人の瞽女

(しゃみせん うた もうもく おんな
(三味線をひいて唄う盲目の女

たびげいにん むしがめ つ
旅芸人)が虫亀にたどり着きま

した。日も落ち、吹雪が強くなっ

てきたため、ほかの村へ行くこと

もできず、一夜の宿を乞い願

いましたが断られてしまいました。

ふたり ご ぜ しかた ふぶき
二人の瞽女は、仕方なく吹雪の

なか どうちゆう じゅうにやまがみ いわ した やす ひ よ なか とつぜん
中、道中の十二山神の岩の下で休むことにしました。その日の夜中、突然、

その大きな岩が山から転げ落ちました。二人の瞽女は下敷きとなり亡く

なってしまいました。それ以来、吹雪の夜には決まってこの石の下から

しゃみせん おと き ひとびと いし しゃみせん
三味線の音が聞こえるようになったといひます。人々はこの石を「三味線

石」と呼ぶようになりました。



あまやちの池の伝説

ふる あまやち いけ でんせつ
古くからあまやち(尼谷地)の池の伝説として

かた つ おそ だいじゃ うつく
語り継がれてきたのは、恐ろしい大蛇が美しい

しょうや むすめ に はなし
庄屋の娘をさらい逃げる話で、それはいくつかの

ちめい ゆらい つた
地名の由来となっていまに伝えられています。



その昔、田んぼで働く家族のためにおやつを運ぶ庄屋の娘があまやちの池のほとりを通りかかったとき、頭に挿していた美しい櫛を池に落としてしまったのです。娘はあわてて拾い頭に戻しましたが、その櫛はあっという間に大蛇に姿を変え、娘をずるずると池の中に引きずり込んでしまいました。

むら　むすめ　すがた　み　おおさわ　むらじゅう　さが
村では娘の姿が見えないので大騒ぎになり、くまなく村中を探したもの

み　いけ　そこ　みつ　か　みばん
の見つからず、ついには池の底をさらうことになりました。三日三晩かけて

むらびと　いけ　ふち　わ　みず　なが　むすめ　せなか　の
村人たちが池の淵を割り、すべての水を流したところ、娘を背中に乗せた

だいじゃ　あらわ　てん　のぼ
大蛇が現れ、そのまま天に昇っていったといひます。

とちゅう　だいいじゃ　ひとやす　へびくぼ　ご　だいいじゃ　うし　すがた
 その途中で大蛇が一休みしたのがいまの蛇窪で、その後大蛇が牛に姿を
 か　す　こまつぐら　いけ
 変えて住んだのが小松倉の池だといわれています。

山古志の生業カレンダー

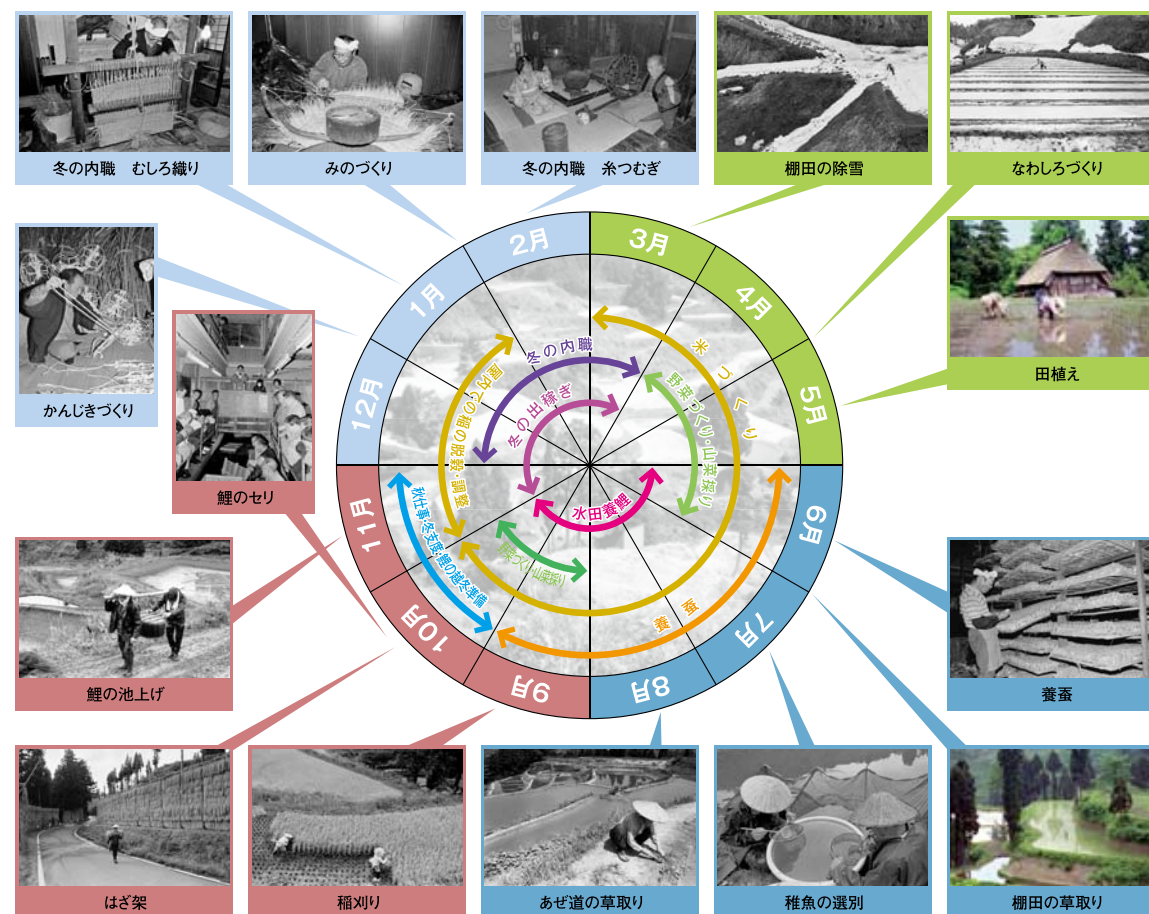
にしきごい せいさん せいさよう むか ようさん うし しいく と か
錦鯉の生産が盛況を迎え、それまでの養蚕や牛の飼育に取って代わり

はじ しょうわ ねんだい やまこし そうてい さくせい えっとうしせつ
始める昭和30年代ごろの山古志を想定して作成したものです。越冬施設

どうにゅう にしきごい きぎょうか てんかい のうか にくようぎゅう しいく こめ
を導入して錦鯉の企業化までに展開した農家や、肉用牛の飼育や米づく

しょうひんか と く いちぶ のうか のち あらわ いっぱん
りの商品化に取り組む一部の農家が後に現れましたが、これは一般の

のうか きほんてき せいかつ
農家の基本的な生活スタイルとなっていました。



棚田と山古志の農業

ほとんど平地のない山古志では、水田を作るためには傾斜地を切り開かなくてはなりませんでした。そのための工夫が棚田です。

棚田を新しく作るにはまず、棚田に適した場所を見つけなくてはなりません。山古志は昔から、地すべりが多い土地でした。地すべりは中越大震災で大きな被害をもたらしたように、大きな自然災害ですが、地すべりがおこると、山の傾斜がなだらかになり、耕作できる面積が広くなりました。また、変動によって土壌が混ざり合い、農作物の生育によい条件をもたらす利点もありました。

秋の農作業が一段落ついて、11月に入ると新田切りや小さい田の拡張工事が始まりました。新田切りとは斜面を切り崩して水田を拓くことで、明治から昭和にかけて盛んに行われました。

- ① ツルハシやトウグワで木の根や大きな岩を取り除く。
- ② 新田切りグワや三本グワで表土をはがしていく。
- ③ 三本グワを使って斜面の高いほうの土を引っ掛けて低いほうに飛ばし、斜面を平らにしていける。これをハネックワといい、上手な人になると2間半ほど飛ばしたという。



秋の棚田 1996 (H8) .9.15 片桐



なわしろづくり 1981 (S56) .4.26 片桐

- ④ 田の表面を平らにしながら、石や木の根などを取り除く。
- ⑤ 平グワの外側でたたいて田の畦を固める。
- ⑥ 土俵を落として田の土を締める。
- ⑦ 平らにした田の土を鍬で起していく。
- ⑧ 水を入れてもう一度鍬で起す。これを繰り返すとのり状になった泥が下へとまわり水が漏れなくなる。
- ⑨ 田に水をはり、石引きをする。石引きは木の皮で石を縛り、それを引っ張って、田の底を締めることで、馬や牛を用いることもあった。
- ⑩ 草やわらを入れ、田の泥を作り、マングワを引かせて田を掻き回す。
- ⑪ エブリで平らにならす。

棚田が幾重にも重なる現在の山古志の風景は、毎年のようにすこしずつ棚田を増やしてきた先人たちの苦勞と工夫の結晶なのです。山古志の棚田は水を自然湧水や横井戸といった地下水に頼っていました。これらの水は非常に冷たく、そのままでは耕作に適したものではありませんで

した。このため、ため池や堰、よけあぜを作り、棚田に入れるまでに水を温める必要がありました。取水口近くには冷水に強い種類を1、2坪作ることもあったそうです。

横井戸は水田の適地と思われる近くの山を見定めて、山の深いほう、北に向かって掘っていきます。北向きのほうが水を多く引き出せるそうです。地下水が流れるように勾配をつけて掘っていき、50～60mほど掘ると必要な水量が集まりました。真夏は井戸の中と外との気温差が大きすぎ、寒くなると地下水の量が増えて掘りにくくなるため、横井戸掘りは8月末から9月いっぱいにかけて行われました。

この横井戸掘りの技術がのちに隧道を掘ることに生かされました。



山古志と鯉

錦鯉の歴史

錦鯉は江戸時代後期ころ、二十村

郷で食用として飼われていた鯉に、突然変異で色のついたものがあら

われたのが最初といわれています。



錦鯉の池上げ 1996 (H8) .10.10 片桐

1781 (天明元) 年の大干ばつの際には、塩谷の水神である蛇神を祭る仙竜池に二十村の鯉の逸品を放って絶滅を免れたそうです。明治時代の初めには錦鯉を東京などへ出荷するようになっていたようです。

この錦鯉が全国的に知られるようになったのは、1914 (大正3) 年、東京大正博覧会に「変わり鯉」の名で出品されてからといわれています。その後、度重なる品種改良の結果、さまざまな模様の鯉が生み出され、ヨーロッパ、北アメリカ、アジアなど世界各地に輸出され、NISHIKIGOI の名称が海外でも定着しています。

中越大震災で、錦鯉を養殖する溜池が大きな被害を受け、イケスで飼っていた錦鯉も停電によって酸素を送れなくなったことにより大きな被害を受けました。しかし、救い出した親鯉たちから錦鯉の養殖は復活し、錦鯉の起源の地の伝統を受け継いでいます。

鯉料理

ないぞう こい ち ふく こい かくぶい あま
内臓や鯉の血も含め、鯉の各部位は余すところなく料理されてきました。刺身、アライ、ヌタ以外に、煮物のコイコク、甘煮、甘露煮もあり、料理法が多彩です。

さし み
刺 身

ア ラ イ さしみ
刺身のようにさばいて、さっと湯を通して、こおりみずにつけて、あぶらとわさび醤油などを付けて食べます。

ヌ タ こい
鯉のはらわたを大根おろしといっしょに、酢をいれ、砂糖をかくし味に少々いれて食べます。

コイコク じる
ヨウ汁ともいいです。いいところを刺身やアライにして、残りの肉のついた骨を煮て、味噌で味付けして食べます。

あま に 煮
砂糖と味噌で甘く煮て食べます。

かん ろ に 煮
甘露煮 10センチほどの小さい鯉を、砂糖と醤油で煮たものです。骨まで食べられます。



アライ



ヌタ



コイコク



甘煮

生活の中の牛

やまこし く うし
山古志の暮らしにおいて、牛は家畜として大きな役割を果たしていました。

やまこし ちいき うし
山古志では、ほかの地域から牛を

にゅうしゅ ひいく おこな うし にゅうしゅ ほうほう
入手して肥育を行っていました。牛を入手する方法は2つありました。

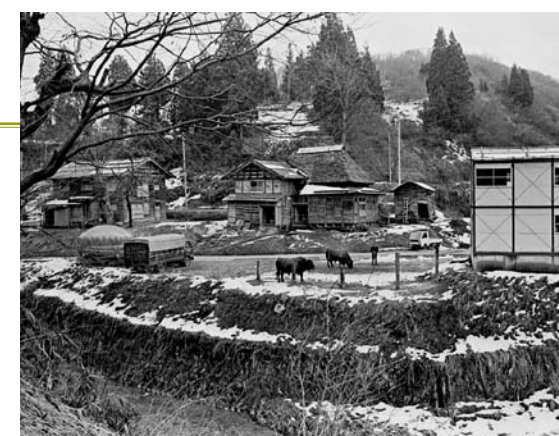
め こうにゅう ほうほう かちく かいつけ
1つ目はバクロウから購入する方法です。バクロウとは家畜の買付をせんもんひとびとやまこしあいづちいきうし
専門とする人々で、山古志のバクロウは会津などほかの地域で牛をかいっ
買付けていました。

め ながおか かりわ へいやぶ のうか あず ほうほう はる おとず
2つ目は、長岡や刈羽など平野部の農家から預かる方法でした。春の訪

はや へいやぶ さんかんぶ やまこし はや たしごと はじ
れが早い平野部では、山間部の山古志よりも早く田仕事が始まります。

やまこし ひとびと へいやぶ のうか たう てつだ で はる たしごと
山古志の人々は、平野部の農家の田打ちの手伝いに出ました。春の田仕事
がすむと、出先の農家の牛は用を終えます。そこで、牛を預ってやまこし
かえ せわ がつ か ぬし うし かえ やまこし
帰り、よく世話をし、11月ごろに飼い主に牛を返しました。山古志で
うし こ も ぬし かえ せんし れいきん こめ
牛がよく肥えて持ち主に返ったと村史にあり、礼金や米をもらったそう
です。

しょうわ ねん ちょうさ やまこし けん のうか どう
1957 (昭和32) 年の調査によれば、山古志の990軒の農家で、4頭の



牛飼いの家 1988 (S63).12.4 片桐

馬と、370頭の牛を飼っていました。種芋原では1963（昭和38）年まで牛を飼い、堆肥取りと田こなし、荷運びに使っていました。中でも、牛から取れる堆肥は大事だったといいます。当時の化学肥料は質が悪く、米作りに堆肥は欠かせませんでした。堆肥を入れると「土ができ、ベトがすべっこくなって、アキオチを防げた」といい、地味の悪い田の土質を補う上でも重要でした。堆肥を得られる牛の飼育が、現金収入や商品流通に困難さを伴う山間地集落において、大きな意義を持ったことがわかります。

農作業では、牛を田こなしに使いました。マングワを引かせて、田の土を細かく砕きました。棚田の開発には、崩れたり水が漏れたりしないように、牛に田の底を踏み固めさせたと村史にあります。

また、荷運びでも牛が活躍しました。山間地にある山古志では、ほかのところへ行くには峠を越えていく必要があります。生活の場である集落と生産の場である田や山林の間も、物資や収穫物を運ぶには苦勞が伴いました。斜面で重い荷を運んでくれる牛はありがたい存在でした。

牛のエサとなる草はススキが中心で、ハギ、フジノハ（葛）もよいといい、マメ科の植物が、牛に食わせるにはよかったといいます。牛に与えるだけの草刈りは大変な労働が必要でした。毎日朝飯前や夕飯前に草を刈り、牛小屋に運びました。田仕事が忙しい



マングワ



牛の散歩 1997 (H9).6.8 片桐

時期ですから、山に仮の牛小屋を作って、日中は牛を入れておきました。牛と一緒に山へ行き、仕事が終わると牛とともに山から帰りました。

このように、山間地の生活条件が、山古志の日常生活と牛の飼育を結び付けたといえます。

山古志では牛を仕事に使うだけでなく、家の中に厩を作り、牛を家族の一員として愛情を注いできました。現在、国指定重要無形民俗文化財となっている角突きは、このような人間と牛との深い結びつきがあって生まれた山古志の誇り高き文化です。

闘牛の歴史

牛の角突きについては、古来からの遺風で長い歴史があると聞いていますが、記録的資料がないため今だに由来、起源等については定かではありません。



種芋原の闘牛大会 1983 (S58).9.4 片桐

また、牛の角突きはほかにもありますが、いずれも起源については、誤楽から始まったものと、祭祀から始まったものといわれています。

徳川時代の文豪、滝沢馬琴の書いた「南総里見八犬伝」を見ると、この地域のひと時代前の角突きを、最もよく知ることができます。八犬伝に「当国古志郡二十村には、毎年三、四月の頃、或は寅の日の吉辰(よきひがり)をト定(えらびさだ)め、角突きと唱える闘牛(うしあわせ)の神事あり、今茲(ことし)は隔明日(あとつて)興行す」と記入されています。

角突きは昔から神事として行われてきたので、土地の人々は、不浄の人は、角突き場に出てはならないといわれていました。

出稼ぎ

出稼ぎも家の生活を支えてきました。一家の主人や主婦となる前の若者は、同世代の仲間で出稼ぎグループを作り、山を離れ、その仕送りが現金収入源となって、一家の生計を支えたのです。若い男性は、関東や北陸方面で生活物資背負いのニブイと土木工事、若い女性は、関西、関東方面の紡績工場の女工や商店などの奉公人として働くのがほとんどでした。

家を守る主人の出稼ぎは、田んぼの作業にあわせて行われるのが特徴でした。雪の多い山古志では平野部よりも雪消えが遅くなるため、田打ち、代かきなどの田植え前の仕事が平野部よりも遅く始まりました。この差を利用して、刈羽郡や三島郡に農作業の出稼ぎに行ったそうです。また、農閑期である冬の間には、主人も関東を中心に出稼ぎに行きました。

その他の仕事

養蚕

養蚕は生計の重要な現金収入源でした。

養蚕とは、蚕を飼って、その繭から生糸(絹糸)を取る産業です。養蚕

は江戸時代に始まり、明治時代には日本の重要な輸出品として最盛期を迎えました。

かつて、農家では米づくりのサイクルとほかの多様な現金収入とがうまく組み合わされていました。なかでも、養蚕は現金収入の少ない時代の重要な収入源でした。一度に飼う量は、蚕のエサになる桑を栽培する桑畑の面積によって決まっていました。養蚕は、室内の温度の調整、桑の手入れ、桑の量の確保に大変神経を使う一家をあげて取り組む仕事でした。繭は近辺の町に出荷する以外に、少量ですが、自家用の真綿づくりにも使いました。



養蚕の様子 1991 (H3) .6.30 片桐

その他の仕事

炭焼き

炭焼きの起源ははっきりしませんが、男たちの農間稼ぎの一つで、秋半ばから冬が来るまでに焼き上げました。クヌギや檜などを材料とした軟らかい和炭を生産していました。江戸時代、長岡藩領であったころは年貢の対象となっていました。明治時代以降も、種芋原や檜木、池谷、



炭焼きの様子 1989 (H1) .12.3 片桐

木簗、小松倉などの集落で、生産は続けられ、集落内での売買のほか、役場や学校、郵便局、農協などに売っていたといいます。

また、このほかに各地の集落では「かじご焼き」を作っていました。かじご焼きは木を焼き、上から土をかぶせて不完全燃焼させて作る簡易的な炭で、自家用に用いられました。

隧道

山古志と隧道

二十村郷の集落は、山に囲まれ、冬になると数メートルの雪が降り積もり交通の障害となり、頻繁に発生するなだれは人々の命までも奪う恐ろしいものでした。

明治時代以降、このような交通事情を克服するため、道路を整備しようとする意識が高まり、昭和に入って、道路整備の一環として峠道を隧道によって克服することが試みられるようになります。これらの隧道は村人たちが自分たちの手で、カンテラの灯りをたよりに片刃のツルハシとスコップで掘り進められました。このような大工事を村人の手によって



中山隧道 1989 (H1).2.11 片桐

成し遂げられたのは、棚田の横井戸を掘る技術と、雪から自分たちや子どもたちを守るという気持ちがあったからなのです。

山古志にいくつかある手掘りの隧道のなかでも、中山隧道は、村人が足掛け16年の歳月をかけて長く大きなトンネルを掘り貫いたということで広く知られています。



中山隧道の内部 1989 (H1).2.11 片桐

中山隧道は、山古志の小松倉地区と魚沼市水沢地区(旧広神村)を結ぶ長さ877mの手掘りのトンネルです。1932(昭和7)年に計画が立ち上がり、途中戦争による中断を経て、1949(昭和24)年5月に貫通しました。カンテラの灯りをたよりに片刃のツルハシとスコップで掘り進める手作業で、農閑期などを利用して作業は根気よく続けられました。

当初、十分な照明設備がなかったため、暗闇の中で手に持った傘の先を壁面にあてて間隔を保ちながら進むというような状況もあったそうです。それでも、雪の中の峠越えに比べてはるかに安全でした。

1998(平成10)年に新中山トンネルが開通したことによって、手掘りの中山隧道はその役割を終えましたが、新潟県によって記念保存が決定され、現在もその姿を見ることができます。

隧道

隧道の紹介

日本一の手掘り隧道である中山隧道のほかにも山古志には、生活と安全を確保するために数々のトンネルや隧道が掘られました。

【水路トンネル】

小松倉にある水路トンネルは、1895（明治28）年10月に掘り始められ、冬場の作業で13年をかけて1908（明治41）年12月に貫通しました。この水路トンネルは、水を確保するため掘られました。掘った土でため池を作り水源にしました。

【七曲隧道、東隧道】

七曲隧道(木簀)、東隧道(梶金 - 木簀間)は集落の子どもたちが通っていた「梶木小学校」への通学で冬場の峠越えを避けるために昭和

初期に掘られました。七曲隧道は現在、その姿を見ることはできませんが、七つ曲がりかどがあることから名づけられました。東隧道も中越地震



七曲隧道を通り新聞配達をする女性 1980 (S55).54 片桐

による被害で通り抜けることができなくなりました。

【羽黒隧道】

牛などで羽黒山を越えて物資を運ぶことができず、人がものをかついでいたことや、冬には吹雪やなだれなどから危険を避けるために

羽黒隧道が掘られました。1949（昭和24）年12月から掘り始められ、1952（昭和27）年3月に完成しました。現在は、羽黒隧道の姿はありませんが、羽黒トンネルとして受け継がれています。



羽黒トンネル(左)と羽黒隧道(右) 1991 (H3).12.29 片桐

【雪中隧道】

雪中隧道は、小松倉の子どもたちが東竹沢小学校に通うために掘られました。東竹沢小学校が開校した1977（昭和52）年の12月に完成しました。冬の間だけの利用でしたが、なだれの危険がない隧道を歩くことができました。



雪中隧道 1979 (S54).5.6 片桐

冬の道づくり

雪で孤立し、雪の下に埋もれる半年間を生きるために、屋根の雪掘りと道づくりは村に残る人たちの最大の仕事でした。

なかでも、道づくりは、1日が道づくりから始まり、道づくりで終わるといわれるほどの仕事でした。雪の中の道は冬道といって、長年の経験により、尾山、田んぼや畑を通り、なるべくなだれのおきやすい場所を避けて作る最短距離の道です。また、家と家、村と村、そして学校や公共施設まで移動ができる冬道を作ることを、道つけ、道踏みといいます。



屋根の雪掘り 1984 (S59).2.19 片桐



コスキ

コスキで雪を払って、かんじきで雪を踏み固めてはじめて雪の中の生活が可能になるのです。

村内では、家の道付け範囲は昔から決まっていて、隣家が踏んだ道とつながってはじめて、家同士の行き来ができるようになります。雪の多い日は1日に3回の道踏みをしないと、道が埋もれてしまいました。

朝の道踏みは小学校3、4年くらい

の子どもの仕事でした。必ず5時半ごろから道を踏みはじめました。朝の道はなるべく固く、そして、夕方はなるべく広く踏んで作っていたそうです。

村から小学校までの通学路は、駄賃を出して、村内の人に一冬、道踏み人夫として頼み、朝夕の道を付け、村内で踏んだ道とつなぎ、子どもの通学路を用意しておきました。ただ、どうしてもなだれがおきやすい場所を通らなければならないので、手掘りトンネルを作ってなだれを避けてきました。よく知られているのは、梶木小学校に通うために掘られた七曲隧道と東隧道(梶金隧道)でした。多少は危険を免れたでしょうが、それでも、冬の間通学路をつなぐ作業は欠かせない仕事でした。



道つけの様子 1982 (S57).3.7 片桐

冬の食料 (野菜の保存)

雪に埋もれる半年の間、食料が不足しないように、さまざまな工夫が重ねられてきました。まず冬支度に秋野菜を保存します。野菜が凍らないように、ねぎや白菜、にんじん、大根などを、



ゼンマイもみ 1987 (S62) .5.10 片桐

彼岸ころに少し干して水気を取ります。11月ころ、家の縁の下にある穴倉をきれいに掃除して、そこにこれらの野菜を貯蔵します。そこは囲炉裏に近く、野菜は凍らないそうです。囲炉裏の上の余熱も有効に利用して、山芋をつるしたり味噌玉を干したりします。外には大根立てがあり、大根を入れて貯蔵し鮮度を保ちます。越冬野菜が食べ終わる春先ころから山菜が出るまでの1ヶ月はもっとも野菜が不足する時期です。大根立ての大根、それまで干しておいたゼンマイや、塩漬けのウドやワラビ、そして塩漬けのきのこなどを出します。さらに残った大根は、切り干し大根にして夏まで食べ続けます。

山での生活

「ヤマを歩く」「ヤマをさわぐ」は今でもよく耳にする山の言葉です。住まいが集中していて生活の場であるムラと区別して、ヤマは生産の場です。ヤマは田んぼや畑のことを指すだけでなく、草刈りと植物採集などが可能な境界のない場所も指しています。ヤマ歩きの場合のヤマは後者を指し、ヤマから食料や生活に必要な燃料を採集する場所を指しています。ただし、このヤマの場合は実際に歩いて、さわがないとそこから収穫物を得ることはできません。

子どもは、物心がついたころから、親に連れられて、ヤマを歩いたり、登ったりして、遊びからヤマ歩きを始めます。小学生になると同時に、家事や山仕事を手伝わされます。子守り、牛の草刈り、稲運び、蚕の手伝い



ヤマ仕事を手伝う男の子 1991 (H3) .9.22 片桐



ヤマの池で泳ぐ子どもたち 1996 (H8) .6.1 片桐

など、子どもの仕事は決して軽いものではなかったのです。

「どこそこの山に、セナコージと荷縄をもって、稲ぶいに来い」と親が残したメモを見て、山に出かけます。親が子どもに「ワッパカ仕事」といって、仕事の分量を与え、それを終えたら、遊びに行っていていいという区切りを作ったのです。遊び心いっぱいの子どもは仕事の手伝いの傍らに、ヤマを歩く楽しみを覚えるのです。ヤマでおやつ探しをするのはそのひとつです。雪が消えるころのアサヅキ、カンポ(イタドリ)、スッカシ(スイバ)、夏ころのヤマイチゴ(桑の実)とスモモ、秋の栗拾い、ヤマは一年中子どもにおやつを与えてくれる場になったのです。

崖や傾斜のことをヒラといい、ヒラサワギは特別に山菜採りのことを意味します。長い冬が終わるころは野菜も不足しがちになります。山菜は一家にとって大変貴重な食料であり、また町場の人々との付き合いに欠かせない山の手土産でした。「ヒラサワギをしたら、いわるね(疲れるね)」というように、山菜採り、なかでもゼンマイ採りは、大変骨が折れる重労働でした。

山菜採りの場所は親から受け継ぐものではなく、ヤマをさわぐ回数を重ねていくうちに、自然に覚えるものです。ウドのでる場所、ゼンマイのでる場所、傾斜なのか、地形はどうなっているのか、怖い場所なのか、といった情報をヤマをさわぐなかで知識や採集技術を覚えていくのです。

中越大震災の発生から帰村まで

新潟県中越大震災

2004(平成16)年10月23日午後5時56分ころ、新潟県中越地方を震源とするマグニチュード6.8の地震が発生しました。震源地は川口町(現在の長岡市川口地域)で、最大震度の7を観測し、山古志村では震度6強を観測しました。

山古志村では各地で大きな地すべりが発生し、ライフラインが途絶え、全ての集落が孤立しました。外から助けを呼ぶこともできず、余震が続く中、集落の人たちは安否確認をし、家の下敷きになった人や高齢者を助け出したりしました。そして、路上などで身を寄せながら一夜を明かしました。



地すべりによりせきとめられた芋川 2004 (H16) .10.29



避難所の様子 2004 (H16) .12.13

地震発生2日後の25日には、避難勧告が避難指示に切り替えられ、
2005（平成17）年4月に合併することが決まっていた長岡市へ全村
避難をしました。着の身着のままヘリコプターに乗りこんだ住民は、
山古志の惨状を目に焼きつけながら避難しました。それは、祖先の時代から
守り慈しんできた田んぼや畑、山古志の美しい風景が崩壊した姿でした。

住民は長岡市内の高校の体育館など8つの避難所に集落ごとに身を
寄せ、その後も仮設住宅などで生活をしました。避難生活の中でも、故郷
の山古志に帰りたい、美しい山古志を取り戻したいという思いをあきら
めませんでした。そのような中で、全国からの温かい励ましや激励は復興
に向けて大きな力になりました。

驚異的な速さで復旧が進み、震災の翌年である2005（平成17）年7
月には8集落の避難指示が解除となり、徐々に帰村が進みました。そして
2007（平成19）年4月には、全ての集落で避難指示が解除されました。
これにより同年12月に全ての住民が仮設住宅から退去し、長い避難生活
は幕を閉じました。

山古志地域の帰村率は63パーセント（2009（平成21）年4月1日現在）
と地震前に比べ人口は減少しました。しかし、新しい故郷を作り、生まれ
変わった山古志の姿は全国に発信され、現在では中山間地域における
復興のモデルケースとして注目されています。



地震の被害にあった錦鯉 2004（H16）.12.13



2004（H16）.10.23 17時56分で止まった時計



一時帰村 2004（H16）.12.13



山古志災害ボランティア活動 2005（H17）.9.16



ドラム缶でつくった希望の鐘で年越し 2006（H18）.12.31



仮設住宅でひなたぼっこ 2006（H18）.4.12



錦鯉のセリ 1993 (H5).10.31 片桐

「つなごう山古志の心」に込められた願い

しょうらい やまこし すがた
将来の山古志の姿。

わたし きょうつう おも こころ
そこには私たちの共通する想い・心があります。

やまこし こころ うつくし しぜん けいかん
「山古志の心」そして、「美しい自然・景観」をいつまでも守り抜き、

みらい にな こども たち う つ
未来を担う子ども達に受け継いでいくこと。

わたし いちばんたいせつ じゅうよう ねが
このことが私たちにとって一番大切であり、そして重要な願いです。



かやぶきの家並み 1981 (S56).4.5 片桐

きょう りよく
協力

しゃしんきょうりよくけいしょうりやく
写真協力 (敬称略)

せいさく へんしゅう はっこう
製作・編集・発行

と あ
問い合わせ

はっ こう び
発行日

いん さつ せいほん
印刷・製本

やまこし ちいきじゅうみん
山古志地域住民のみなさん

かたぎりつねへい
片桐恒平

ながおか し やまこし ちいき そうせい きんじぎょうじっこう いんかい
長岡市山古志地域ふるさと創生基金事業実行委員会

ながおか し やまこし ししよ ちいきしんこう か ちいきしんこう ぼうさいかり
長岡市山古志支所地域振興課 地域振興・防災係

ながおか し やまこし たけざわおつ ばん ち
長岡市山古志竹沢乙461番地

TEL 0258-59-2330

FAX 0258-59-2331

E-mail ymks-chiiki@city.nagaoka.lg.jp

2011(平成23)年3月3日

かぶしきがいしゃ
株式会社エイブルプロモーション

